足尾グループからの報告

今現在、手元にあるフィルム・写真はほぼ完了し、チラシ・資料のデータ制作とデータベースのためのベタプリント作業に入ってます。

2018 年、スキャンを前半にした 15 名程のデータから足尾歴史館（会場代無料）で PERT1，PERT2 と二回の写真展『足尾・谷中そして移民のサロマベツ原野』を開く。PERT2 は 2019 年調布でも開催。この 2 回の写真展で見えてきたことは次の 3 点です。

①　写真展の意味

写真展開催中に東京の S 大学環境系の新入生と先生が数台の観光バスで資料館見学。 1 グループ 30 分の館内見学の内容は、足尾の歴史は家に帰ってからでも図書館、パソコンで調べられるので、この場所でしか見られない写真展をジックリ見ること。館長は「この写真展は新入生の皆さんと同じ歳ぐらいの学生達が 50 年前に足尾にきて、見た・感じた足尾を写真に残したものです。」と。後日館長によると、新入生はこの AAjps の写真群を無言で写真に吸い込まれるように見入っていたとのこと。先生はその後再び写真を見に訪れたそうです。

この写真展を開くに当たり、『足尾・谷中・サロマベツ栃木村』年表を作りました。この年表を見た足尾の方々から「足尾町民に栃木村までの歴史を初めて教えて頂いた。足尾町にこの年表を資料として残して頂きたい」と、AAjps 足尾グループが外に向かっての初仕事だった。

②　丁寧なデータベースを作る意味

この写真は昭和 48 年 2 月の足尾銅山閉山式当日、通洞抗口に集まった中学生。この写真を資料として使わせて頂きますと言われたのは、東京の W 大学社会学科の先生でした。ゼミ生と一緒に足尾の閉山時期の落書き・ポスター・チラシ文等々を研究に来ていました。また、当時の街並み写真と同じ今の場所の写真を撮り、どの様に街並みが変わったか、変わらないのは何か、その変遷を読む研究には沢山の写真の中から探します。その時は日光市にある写真保存場所にこもるそうです。

例) データベース＜昭和 48 年 2 月足尾銅山閉山式、通洞抗口に集まった制服姿の中学生、鞄の肩掛けベルトに落書き＞

③　足尾町に足尾データベースを保存する場所を作りたい ― 日光市市議会議員 S さん

この写真は鉱毒予防工事視察に田中正造（中央の白いマフラー）が政府の関係者と共に足尾に入ったときのもの。作者は小野崎一徳さんで古河鉱業のおかかえカメラマンで、沢山の写真が残っています。その写真・フイルムは東京大学の地下室で見つかり、孫の小野崎敏さんが引取り、法政大学の研究室で全てデータベース化済。日光市市議会議員 S さんに伺った構想では、足尾町に明治から大正の小野崎一徳さんの写真、昭和の写真は元古河鉱業職員の方の写真（日光市に保存）を足尾町で保存したいと考えているので、1969 年以降の写真は AAjps さんに協力願いたいと話されました。

※　小野崎一徳さんの写真は 2005 年 6 月号アサヒカメラに記載されています。　（文責　中谷）

ホームページがリニューアルされました
https://aajps.or.jp

AAJPS Archives of Another Japanese Photo Stream
NEWS PAPER No.11　2021 AGU
一般社団法人 もう一つの写真記録

「集団撮影とアノニマス」勉強会の報告

「集団撮影行動とアノニマス勉強会」は ZOOM を使い 2020 年 12 月 9 日に第一回を開催、合わせて計 8 回行われました。参加者はゲスト（お話を聞くために参加をお願いした）も含めて 14 名になります。「アノニマス」という言葉が注目されたのは 2020 年 10 月 26 日に今は亡き金子隆一さんと岡崎英夫さんとの対談が始まりでした。以下は金子さんの発言からの抜粋です。

「AAJPS の集団撮影行動は『アノニマス』なものだと思う。そのことが AAJPS として思想化されていない。それが一番の問題であると思う。

『アノニマス』は今、写真表現の重要な問題となっている。撮影者のアノニマスの問題は今の写真表現の先端的問題。『今　アノニマスをどう捉えるか、歴史を含めてアノニマスの持っている写真の可能性』が欧米やアジアで注目され、それを一つの表現と使用としている写真家が出てきているし、写真表現の重要な問題となっている。アノニマスと言っても YouTube で日々たくさんの写真がアップされているがそれとは違う。あれはアノニマスの人が撮ったアノニマスな写真。広い意味での芸術ではない。私たちは 1968 年にそのことを問題とした。」

※サイボウズ　フリートーク 262 の中に対談の音声の全部がアップされています。

金子さんの言葉の意味を捉えようということと、「集団撮影行動」は「1968 シンポジュウム」など写真評論家の中では色々解釈されていますが、私達の中ではきちんとその意味が定義されていない、その 2 つを検証することが「集団撮影行動とアノニマスの勉強会」の始まりでした。読むためにプリントアウトした資料はファイル 2 冊に収まりきれない量となりました。一番大きかったことは私達は今まで『状況 1965』をバイブルのように読んだり、見たりしてきました。しかし本を見るだけでは分からなかった、当時の全日本学生写真連盟のどういう状況から写真を“自己認識、そして世界認識の方法として位置付けたのか”を全日会報 52 号、53 号や資料や当時参加した人たちの証言からわかったことです。AAJPS のアーカイブの対象は 1965 年から 1979 年の 14 年間であるため、参加者の年齢も参加した時代もちがいます。だからこそ私達の原点を共通確認する必要を改めて感じました。

そのほか勉強会では集団撮影が生まれた 1968 年全日会報を読んで考えたり、また西井一夫のプロヴォーグについて書かれた評論や「アーカイブスとは何か」などもテーマとして話し合いました。正確に全貌をお伝えすることは困難なため参加者に感想を書いていただきました。

※サイボウズ・ファイル管理の中の「アノニマス勉強会」の中に全八回の発言の全てが記録として残してあります。会員の皆様はどなたでも読むことができます。　（文責今村）

参加者の感想　（アイウエオ順）

阿部静子（1965 年入学）

全日の歴史は従来の「共同制作」の批判から始まり、新しい表現 65 キャンペーンへと展開していった。65 キャンペーンは、写真とは状況と向き合った時点においてしか成立しない、サークルにおいても、個の変革へつながっていく組織体であること。今後の活動の通底をなしていることを改めて感じました。

大妻写真部として参加したのは 67 年からの参加なので、65,66 の体験はなく、大学 3 年からの関わりなので、今回は全日の活動を俯瞰して見られたのは良かったです。

その中でも 68 年激動の時代のなかで、表現の世界においても、いろいろと表現力として噴出してくるが、それぞれ個人的であった。全日は 65 から個人と状況という形で展開してきたが東氏の「個人の持ち方が行為そのもの、人間としての個である」ゆえに「全日はある意味で全体で展開できる資質があり、集団撮影が成りたった。」という発言に同感しました。

また私は 67 年の多様な個人の持ち方が、東の写真表現と結実してきたのが臨界点に達し、その噴出の力が、時代の変質と動的な関係を作り出し、ダイナミズムな集団撮影を生み出し、無名性が存在したのではないかと思う。

私自身も、その動きに突き動かされて参加していったのである。

時代とは何かと、向き合い戦った痕跡を記録に残していきたいと思っています。

今村ひろみ（1967 年入学）

全日本写真連盟がおこなった集団撮影行動は写真界の中では異彩を放っていて 68 展のシンポジュウムやその他の場所でも写真家や写真評論家の皆さんから取り上げられています。ただ私はどれを読んでも少しずつ内容の核心には触れられていない歯痒さをもっていました。AAJPS のアーカイブの中で核心部分である集団撮影行動と無名性について当事者であった私たち自身がはっきりさせておくこと、そしてそれをきちんと文章化して残すことがこの勉強会の始まりでした。

1　　アノニマスの始まりは『状況 1965』

『状況 1965』がどういう所から始まったのか、ということについて全く知りませんでした。つまり 1967 年入学の私にとって『状況 1965』はすでに出来上がった本でした。状況 1965 は共同制作批判から始まりました。共同制作の作り方は一人一人がコンテに従って写真を撮ること、自分を殺してコンテ通りに写真を撮ってくることでした。そこからから自分が撮りたいものを撮ること、つまり「一人一人が自ら興味が湧かない限りシヤッターは押せない」という大原則を取り戻す「革命」であったと思います。言葉を変えれば“写真を自分の生きることに重ねることができた瞬間”だと思います。そしてそれを取り戻した時のみずみずしい写真群が『状況 1965』の写真であることがわかりました。実際に参加した皆さんからは「そこで名前を出すことなど全く考えられなかった」と話されています。私はこの時点で全日の無名性は始まっていると思います。『状況 1966』では全日の中では盛んに言われている「自己認識から世界認識」への変換はさらに大きな展開だと思います。これは勉強会の中で zoom を使い一枚一枚の写真を見ていくという作業を皆さんで行う中で改めて感じさせられました。

2　集団撮影行動への道

集団撮影行動が生まれたのはある意味 68 年の時代状況が大きかったと思います。67 年入学の私は写真が何たるかはよくわからないうちに闘争の事態に直面しました。ノンポリの私でさえ新宿や防衛庁のデモには行き 68 年の 10.21 は新宿にいました。周りでは逮捕されるのは日常茶飯事で全日の中で逮捕されたときの心得まで知らされていました。ゲバ棒か写真かの議論は掴みあいの喧嘩に発展しそうなまでに激しく行われていました。激動の時代の中で写真というものは成立するのか、そういう中で、福島先生が書かれていますが、「武器としての写真」という考えが強くなってきたのではないでしょうか？

67 年から 68 年の集団撮影への転換は資料や参加されたかたの意見を重ねてみてもはっきりとわかりませんでした。

3　作家性とアノニマス

この勉強会は金子隆一さんと岡崎英夫さんの対談で「アノニマス」という言葉が使われそれが何であるかという疑問符からはじまりました。アノニマスについては勉強会のなかでは作家性が強いのではという話がされました。いみじくも東松照明は「アノニマスに向かおうとすればするほど自分の作家性が際立ってしまった」と言っています。個人の作家にとってアノニマスとは憧れであると同時にそこに行けない矛盾を抱えていたと思います。

私は福島彰秀さんの自画像の写真を初めて見たとき強い衝撃を受けました。自画像の一連の写真は「内なる国家」と「日本の歴史」に向かうものではないかと思います。そしてそのあと出てきた集団撮影は、福島さんの自画像とは方法論の違いという位置付けで、共有、評価できなかったのか？　たった一人でも世界と向かい合う、そういう方法論が集団撮影の中でかき消されたとしたら残念です。全日本学生写真連盟の中で写真を命がけで撮ったたくさんの人たちがいて、さらに優れた写真を撮った人たちが居ながら写真家があまり出なかったという現実を見ると、それはかげに色々な問題を含んでいたことを考慮しても残念です。

4　やり残した課題について

●福島辰夫氏について

全日本写真連盟はほとんど組織的形をとっていません。また代表も選挙や合議の上決めた痕跡もありません。むしろ福島先生の意向が強く色々な決定も先生の判断によるものが多かったと言わざるを得ません。福島先生が何をやろうとしてどこまでやれたのか、これは一度別の場で検証してみたいと思いました。

●時代状況との関連

状況 1965 を出す前提となった共同制作批判は一方では組織が人間を駄目にしていくという、あの時代の背景があったのではと考えます。また集団撮影についても全共闘が出て、全共闘の思想「無名の人たちの共闘」「マス」の思想が影響していたとも思います。また集団撮影が次第に力を無くして最後が「われわれの写真」となるというあたりも社会と時代をしっかり見極めないと総括できないと思います。私たちも時代と戦いながら時代とともに変わっていったと考えますが、そのあたりは検証できていません。

岡崎英夫（1968 年入学）

芹沢銈介に惚れ柳宗悦の民藝運動に興味を持ちそちらに進もうと思っていた時期がありました。実用性、無銘性、複数性、廉価性、労働性、地方性、分業性、伝統性、他力性という「民藝品」の特性が自分にとっては全日の理念と重なっていました。映像に携わっていたいという思いからアニメ業界に身を置き写真から遠ざかり写真に対する考えは学生時代で停止していましたが、写真をずっと志向し全日を長期にわたって検証している金子さんとの対話の中で「アノニマス」という言葉を教えていただき、柳宗悦を父に持つ柳 宗 理の「アノニマス・デザイン」を知ることになりました「アノニマス」は写真家をふくめ建築家からインダストリアルデ ザイナー等、作家の、社会における役割を意味づけていました。また、関連した資料を集める中多くの写真論の存在を知ることにもなりました。グローバリズムのなかでのナショナル・アイデンティティはアニメ業界にいて強く感じていましたが、国民国家の下の地域や共同体に分け入ろうとするヴァナキュラーは記念写真やアマチュア写真の可能性を感じました。何がわれわれの現在を依然として包囲しており、何がそこからすでに遠ざかりつつあるのかということを見極めるためのものであるということだ。アルケオロジーは、われわれ自身を診断し、われわれ自身の連続性や同一性を問題化する。それは、われわれが身を置いている思考の地平からの離脱のための努

滝沢明子

・第五回研究発表会 書評：『イメージを逆撫でする』の謎 2020/10/25、オンライン開催 増田展大（九州大学）nobu0125888@gmail.com

・［“写真”の現在形］写真 1990-2010 ――「戦後写真」の終わりと「日本写真」の行方

・「日本の写真の 1968」―「日本写真」「戦後写真」（土屋・小原・飯沢の対談　）

・1972 年朝日ジャーナル「失われた現実への回避」（『ヒロシマ・広島・hírou-jímə』の評論）

・アノニマス勉強会　無名性について（いくつかの評論のまとめ）

・イメージを（ひっ）くりかえすー記録集『はな子のいる風景』キューレーターズノート

美術館・アート情報 artscape

・まずたしかさの世界を捨てろ　針生一郎

・写真史 / 写真論の展開　　前川 修 (美学会・神戸大学)

・第二回写真フォーラム「北海道と写真のつらなり」/ その 5 2019 年 2 月 24 日北海道美術ネット別館 .webarchives

・挑発する写真家「中平卓馬」小原真史多摩美術大学大学院／東京綜合写真専門学校研究科

・匿名の権力―「異議申立て」の映像群（『10.21 とは何か』『解放区 ‘68』）

・西井一夫　「20 世紀写真論・終章 - 無頼派宣言 01」

・西井一夫　「なぜ未だ『プロヴォーグ』か」

・「影像 2013」参加作家インタビュー（9）湊雅博さん――協同の場から生み出される写真

◉年表

・アノニマス資料年表　全日本学生写真連盟と 491 の年表　（福崎作成）

・年表　戦後写真の転換　写真装置

これらの資料はサイボウズのファィル管理の「アノニマス勉強会資料」に納められていますので会員皆様はご覧いただけます。

アーカイブ進捗状況（'21/6/11～8/10）

長崎チーム

‘71 立教：矢野．2～4 次 83 本スキャン済み、’71 関学：伊達 .2 次 22 本スキャン済．

２次六つプリント 162 枚スキャン済。

明治：広飯・香川大：佐藤・福井工：田中のベタ２９枚を 8/3、サイボウズにアップしベタチェック再開。他吉田・猪塚・村川・西村ら 29 本のアップ準備。

6/19･7/25「チーム長崎」会議、ネガ収集･進行管理･今後について話し合う。

北海道 101 チーム

5 月 16 日から 101 第 1 期 170 本をサイボウズに立ち上げ、ベタチェックを開始した。

ベタチェックは 8 月 15 日で締め切り、そこでチェックされた写真をセレクトする ZOOM での写真例会を今後行う。

次回は第 16 期（1976.3 月）の 250 本をサイボウズに立ち上げベタチェックを開始する

新たに渡さんから借りることができたネガ（10 期～13 期）のスキャンを開始する。

広島・基町チーム

広島・基町チームは展覧会に向けてレイアウトの再検討会を 3 月 6 日調布市の文化会館たづくりで 9 名が参加し写真を並べて行いました。

その後、伸ばすサイズや紙の問題、文章の入れ方などを検討するため合宿を企画しましたが、コロナがおさまらず残念ながら中止となりました。

この間の進捗はありませんが、やることが山積みなので、方法を考えながら進めたいと思います。

公害チーム

・前々回の NP で報告したように、安中の写真集に使用されなかった写真を z-archives に掲載する準備が整った。今検討中の z-archives の方向性が決まったら掲載する。次は富士の写真集に使用されなかった写真に取りかかる。

・ファイル管理で北九州のスキャンしたベタを公開している。

大阪撮影チーム

ＺＯＯＭを活用した会議を２回持ち、ネガスキャン状況の確認と今後の作業について協議した。会議の結果はサイボウズ office 掲示板にて報告した。

・作業工程表の作成

・参加者リストを作成し、参加者にネガ提供を呼びかける

・スキャン不具合のネガの再スキャン

・ベタチェックシートの作成

・サイボウズ office 掲示板に「大阪撮影ベタチェック」を立ち上げ、８月３日よりベタチェックを開始した。

・サイボウズ Office 掲示板にて会員へのベタチェックへの協力を要請した

以上の作業を行いながら大阪撮影の最終形を模索していく

状況キャンペーンチーム

1971 年三里塚代執行のスキャン 100 本終了。

'65 ～ '79 までの全日･491 のアーカイブ作りは着々と進んでいます。お手持ちのネガや資料の情報をお知らせください。

お問い合わせ等：277-0053 柏市酒井根 2-20-11　東　園　hig811@gmail.com

かで、『足ぶみ飛行機』『状況 1965』『状況 1966』や全日会報、未刊の『状況 1967』に触れ、全日本学生写真連盟から「全日」を生み出していく過程や、その主たる思想について大筋での整理がついたように思います。

一方で、ずっと気になっていたのが当時の時代背景や社会の在り様でした。特に『60 年安保』は見過ごすことのできない歴史的要因だと見当をつけ、手元の『昭和・平成現代歴史年表―大正 12 年 9 月 1 日～平成 8 年 12 月 31 日―』（小学館）などを辿っています。

また、すべての局面において大きな影響を与えてきた福島辰夫氏の活動とその思想をきちんと検証する必要があると思っています。

福室　篤（1971 年入学）

この会は全日の始まりともいうべき「状況 ‘65、‘66」当時の「全日会報」から「なぜ状況 ’67 は出版されなかったのか」という第 7 回の話し合いへと、1965 年から 1968 年にわたる全日の経てきた過程（歴史）をていねいに遡り見直していくものでした。自己認識から世界認識へ、そして集団撮影という方法に至る過程を後付けの論理ではなく、当事者の方々の身体に残る感覚からの発言として聞けたことは特に印象的でした。本来極めて個人的な表現である写真において、集団撮影、無名性（アノニマス）という行動を必然として平然と推し進めていった当時の全日を貫いてあった意志のようなものに触れた思いです。そして 71 年入学の私ですが、その感覚はずっと引き継がれてきたように思います。一歩「全日」の全貌へと近づけたのではないかと感じています。

福室茂子（1974 年入学）

写真集『状況 1965』、『状況 1966』が世に出るまでの様々な経緯を知り、その 2 冊の存在が（又、『状況 1967』が世に出なかったことも含めて）、後々約 15 年間も続く全日の写真表現による運動の根源であったことが分かりました。それが何より手応えのあることでした。全日と四九一の残した写真と行為を客観的に評価する為に非常に有意義であったと思います。

山本八千代（1972 年入学）

参加できてとても良かったと思っています。

★理由その 1

理事として関わってきていますが、(致し方ないのですが、運営に関わる話合いが多く) 全日～、写真～等　中身に触れていく機会が出来て嬉しかったです。アーカイブを作るという意味を考える機会を与えられました。

★理由その 2

‘72 から 101、８・６－９、立教いわき、広島　基町、三里塚・絵本等～ 6 年間集団撮影行動に参加してきました。集団撮影行動とは何であったのか～。自分の体験だけではなく客観的に捉えることが出来る事が出来て、アーカイブを作る意味をさらに考える機会になりました。

★★その 2 について

○ 65、66 が作られた背景を知ることができて、とても感動しました。キャンペーンやサークルの停滞から自己認識から世界認識へのプロセスを集団で作ろうとしていたこと。写真という表現を真摯に突き止めようとしていた姿勢とエネルギーを感じることができました。

○ ‘68 という年の持つ意味。68 年は多くのものが溢れ出していることが分かり、掘り下げてみたいと思いました。全日の中でも闘争に向う人、そうではない人。中でも福島彰秀さんが一度は王子に向かったことがあった～という事実を知ることが出来て、私は全日に対する考えが変わったような気がします。福島さんの自画像、動物図鑑等、当時どのように位置付けられていたのか…と思いました。内なる国家というテーマはベクトルが内向き、と単純に片づけられていたのか…。そして大滝さんの発言。「先生は写真を戦う道具として考えていた」という発言も納得のいく事でした。写真表現の裾野を広げる活動が、時代の大きな変動を受けて即時性というか拮抗した形での表現が差し迫っていたとしても、福島さんのような表現者を評価し位置続けることが出来なかったという事実を知ることができました。

集団撮影の持つエネルギーとダイナミズム。私にとってはこれこそが唯一無二、自分を集団撮影行動に参加させた理由です。集団撮影が組織を運営するための手段のようになって行ったという事も、愕然とするような事実ではありました…。

72 年入学組としては、自分の生きている時代とは何か～写真を成立させようとした事実を残していきたいと思っています

集団撮影とアノニマス勉強会　資料項目

◉全日関係

・『状況 1965』・『状況 1966』
・全日会報　52 号～ 64 号
・シンポジュウム 69 報告書
・撮影行動準備会の呼びかけ
・69 キャンペーン合宿報告書
・1966 年「ぼくの知っているとき」（明大カメラクラブ 50 周年誌）
・写真芸術辞典・1960 年前後（福島辰夫関係記載部分）

◉批評・評論関係

・1968 年シンポジュウム記録（東京都写真美術館ホームページ）
・座談会アーカイブと表象文化論の現在（REPRE Vol.33 (https://www.repre.org/repre/) /）
・ロラン・バルト　明るい部屋考察―写真の時間と「狂気」

力、別の仕方で思考するための努力なのである。（日本大百科全書 (ニッポニカ)「アルケオロジー」の解説　［慎改康之］）ミシェル・フーコーの「アルシーブ archive」は過去の写真を蒐集することが映画やアニメのシーンを訪ね歩く「聖地巡礼」による追体験とは異なる撮影行為のアルケオロジー (archéologie 考古学) として全日の写真群がどのような意識で生まれてきたのかどのような行為の結実としてあったのかを検証する AAJPS の基本的な態度を語るものとしてあるようにおもいます。データベースシステムを構築し、美術館や図書館などと連携できればいろいろな可能性が開けると思います。「私はホーボーケンで生まれた。私はアメリカ人です。写真は私の情熱です。真理の探求は私の強迫観念です」（アルフレッド・スティーグリッツ、オキーフの個展のカタログより）こんな言葉を言えるようになりたかった。

小川　茂（1970 年入学）

1970 年地方の入学の私としては、’65 ～ ’69 年の全日関東のまとまった話を聞けたのは大変新鮮でした。今まで写真集でしか知らなかった昔の全日の風が、新しく私の中を吹き抜けたそんな印象です。‘69 年の東大闘争の頃は、高 3 で TV にかじりつき、東京の空気を少しは感じていました。姫路の高校写真部で交流会を始めようと企てましたが、先生に潰さたこと。丁度 60 周年記念行事があり、生徒会や文学部の連中と企画を立てるがこれも潰され、頭にきて式典の最中に 20 人程で退場した苦い記憶を思い出しました。これまでの全日の在り様を解体し、個人として主体を取り戻し、新たな自己認識・自己表現をバネに新しくサークルや連盟そして全日を作り出したエネルギー！「個が個でありうる集団」を目指したこと、それがよく理解出来ました。その事は、‘70 年以降の全日もあらしめようとしていたと思います。又 ’ ６６以降本気で時代と対峙しようと、それが外へ向かう在様の片鱗を感じる事ができました。

なぜ ‘67 は出なかったか、吉本・大滝・阿部・野田氏ら当時のリアリティがある発言は、感じるものがありました。そして集団撮影が生まれたのかそのあたりは興味深いものでした。「一人の居方ではだめなので、集団のパワーで今日的状況の広島の現実を切り崩す。そういう実務的運動体として広島デーが形成された」。初めて聞く話に、戸惑いや解らなさもありましたが、広島デーの集撮の実態とはどういうものなのか、もっと詳しく知りたいと思えました。

‘71 から関西に関わり、‘72.6 月全日猿ヶ京合宿に初参加。以降、関西フォトフェスティバル、全日の長崎 (4 度)・北海道 101（９期–12 期）などに数に多く参加しました。’70 年以降の全日の集撮は、以前のそれとは明らかに違うと思います。全日自体も相当変質していったと感じています。長崎や北海道 101、そして大阪撮影のアーカイブを進めながら、今回は話されたアノニマス・集団撮影行動、更に全日組織・運動などについて客観的に捉え返せたらと思っています。‘70 年代の全日を語る時、『‘72 年夏、100 人を超える人間が 8.6-9 広島・長崎―函館―長崎へと日本列島を大移動した』あの一連の動きを忘れる事ができません。熱にうなされたようにも思えますが、私はまるで「ノアの箱舟」のように見えます。大滝さんは、「とてもありえない話だ」と絶句されました。でも私はあれがとても “ 象徴的 ” だと思います。

東　闘（1964 年入学）

‘67 をめぐる状況について

当時の合宿の総括書や会報によれば、’65 と ’66 のかなり深い総括が試みられている。それは基本的に現実に向かい合う時の本人の主体性の問題として写真にも向かい合うことを要求していたし、その主体抜きには表現は何も語れないし、生き方の問題として、主体のあり方として論じられていたと思う。

正直「状況 67」がでなかったことについて、様子は理解できなくはないけれど、それは結局時代状況に流されただけではないのだろうか。すさまじい勢いで動いていく時代状況に写真で立ち向かう基盤を創り出したのは 65,66 のキャンペーンの積み上げがあったからであり、同時に方法論も内包していたのだと思う。67 を総括しないままで、かつマル斗を全日から切り離そうとしたのは誤りだと思うし、その後、時代状況に押し流されてしまったような結果になったというのは言い過ぎだろうか。

何としても 67 を形として残しておき、その後の展開もキャンペーとして形を残しておくべきであったと思う。たとえどんな形でも、形として残すことはとても重要だと思う。10,21 や 13-17、解放区、NON、10,21-27 のスライド、広大の 8,17-18 スライド・写真集など残されたものは貴重であり、また、個人の作品も貴重なものとして残しておくべきだと思う。金子氏の 68 展で漠然と思った、なかった事にしてはいけないという想いの形が見えてきたように思う。

アノニマスと無名性について

アノニマスはギリシャ語の an- 否定 +onoma- 名前に由来する。

①個があるから集団がある。②集団があることで個が存在できる。①と②は決定的に違う。

互いの個が集団として止揚されたとき、それは個別の名前としては存在しない。私達はそれを経験の中で当然として互いに共有してきたのだと思う。敢えて無名性を気取ったわけでもない。集団で作成されたものの中にははっきりと個人が見えているはずです。そしてそれを私達はアノニマスと呼ぶことにしたのだと思います。

福崎　進（1969 年入学）

全日の『無名性と集団撮影行動』を探る研究を進めるな